

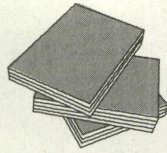
実践の中で味わう

榊田正子

「その人の味はうっかりしている時に出る」と冒頭にあり、「最もいい意味で始終うっかりしている幼児たち」「うっかりしている時が、如何に教育的に大切なたらきをなしているか」と続くこの文章を、今回私は実践の中で味わってみたいと思った。「うっかりしている」状況とはどういうものであろうか。

また私は、常々、保育者が園の教育理念など大切にしていることをきちんと理解し共有した上で、それぞれのもち味を生かして保育をしてほしいと願い、それを言いもし、期待もしてきた。なぜなら、保育者が生き生きとその人らしくいるところであれば、子どもたちもまた、生き生きと自らを充分に発揮するであろうし、そこに充実した保育実践が生まれるに違いないと、漠然と思っていたからである。さらに、私が今日まで出会った多くの先輩や同僚がそれぞれに豊かなもち味で保育する中で、子どもたちがのびのびと健やかな育ちの姿を表しているのを目の当たりにし、その心地よさを感じてきたからでもある。

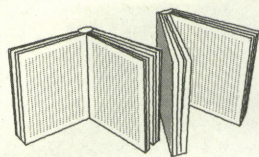
さて今回、倉橋の文章に向き合って繰り返し読んでいくうちに、これまで漠然と感じてきた「もち味」への関心が、にわかに大きくなり、さまざまに考える機会となった。もち



味はまさに固有のものであるから、その中身については、ひと言に言えるものではないが、かといって何でもよいとも思えない。考えていくと、保育の場にふさわしいも味には、ある基準がありそうに思われる。その基準とは、共に在ることを喜びとする感覚である。それがあつて初めて子どものあるがままの在りようを肯定できるであらうし、倉橋のいう「教育の一番ほんとうのところ」に関与する可能性を有するものでもある。

他方「うっかりしている時」はどう考えられるであらうか。こんな場面が思い浮かんだ。

その日予定されていることを準備するために、子どもたちと一緒にホールの大型積木を片づけていた時のことである。誰かが私の背中に飛びついてきた。片づけることに気が持ちがいついて、背後にまったく注意を払っていなかったので驚いた。「あ、びっくりした。誰かしら？」と肩に回された小さな腕をそつと外して振り向くとA男が笑っている。瞬間的に思い出したのは、その日の登園時、門の所で子どもを一人ひとり出迎えていた私の横を「おはようございます」と言つて通り抜けようとしたA男の姿である。実は通り抜けようとした時に、一步後ろを入ってきた母親に大声で呼び止められ、「A男、こあいさつはちゃんと先生の目を見てしなさい」と言われた。A男はとっさに母のほうを振り向いて立ち止まったものの、タイミングを逃し、気持ちが向けられない様子でそのまま靴箱のほうへと走り去つたのである。背中に飛びつかれ、振り向いてA男の笑みをたたえた目を見た瞬間に、朝以来のA男との気持ちがびつたりと合わさつた感覚を覚え、ああ、この時があつてよかつたという思いがして、A男の肩を抱いた。



保育の場において子どもの思いに寄り添うことを考えていながらも、保育者の気持ちがある。その日の予定や伝えるべき事柄にとらわれていて、本当の子どもの気持ちに気づけずにいる時がある。先の場面でも、予定の流れに合わせて率先して片づけをする姿を前面に出すあまり、側面や背後への気配りが抜け、うっかり「素の私」が出ていたのである。うっかりではあったが幸いなことに、その「素の私」の雰囲気は子どもたちと過ごす日ごろのものであって、違和感を感じさせるものではなく、むしろ親しみを感じさせたようである。だからこそA男は背中に飛びつくことができたのである。さらに考えれば、率先して片づけることに余念がない保育者の前面の姿には、A男が思いを込めて飛びつくことのできる余地も心地よさも見いだせなかったのではなからうか。特別な経過や期待で特徴づけられるものではなく、率直さと親しみが醸し出される日常的な雰囲気こそ、その時々の子どものありのままの思いがそのままに受け止められる余地を有するのである。

このように考えるにいたって、私は保育者のうっかりした部分と、そこに生ずる教育の意味あい結びついた感じがした。

そして最後にもう一度想起したいのが、うっかりした時に垣間見える保育者のもち味の在りようである。前述したように「共に在ることを喜びとする感覚」を基準として、率直さや親しみやすさなどの表現が浮かんできたが、さらにそれらを包み込む「温かさ」を忘れてはならないと、いま強く感じている。